

# 裾野市の教育のあり方について

## 提言書

令和7年3月

裾野市の教育のあり方検討委員会

## 〈 目 次 〉

- I はじめに
- II 裾野市の教育のあり方検討委員会
  - 1 検討委員会の目的
  - 2 検討委員会の設置理由
  - 3 令和5・6年度に開催した検討委員会
  - 4 委員の構成
  - 5 プロジェクトチーム会議
- III 裾野市の学校再編
  - 1 学校再編計画に至るまでの経緯
  - 2 学校再編計画
- IV 裾野市の目指す教育（裾野市の教育のあり方についての提言）
  - 1 基本的な考え方（人と人をつなぐ教育）
  - 2 人と人をつなぐ教育の視点
    - （1） 自分を生かす教育
    - （2） 地域とともにある教育
    - （3） 多様性に満ちた教育
- V おわりに

※資料～プロジェクトチーム会議の実践～

## I はじめに

裾野市教育委員会は、令和元年度に裾野市の教育のあり方と学校規模の適正化や適正配置について検討するため「第Ⅰ期裾野市の教育のあり方検討委員会」を設置した。

この検討委員会では、児童生徒数の減少と学校施設の老朽化という課題に対して望ましい教育環境や学校規模の適正化、教育効果等について検討し、論議の結果はアンケート調査も加えて、令和2年3月に提言書としてまとめられた。

裾野市では、この提言書に書かれた学校再編の具体策について協議を進め、令和5年3月に裾野市学校教育施設再編基本計画が作成された。この計画においては令和5年度から令和19年度までの15年間における再編対象学校と再編時期が示された。

この計画を受けて市内各地で説明会を開催したが、再編後の教育のあり方を論議する必要が生じ、裾野市のこれからの教育のあり方を検討するために、令和5・6年度の2年間、「第Ⅱ期裾野市の教育のあり方検討委員会」（以下、「検討委員会」という。）を設置することにした。

令和5年度の検討委員会は合計5回の会合を開催したが、ここでは今日的な課題も含め裾野市の教育を取り巻く課題を整理し、裾野市の強みを活かしてどのような教育が行われればよいかを議論することにした。また、この検討委員会と並行して現職の教員からなるプロジェクトチーム会議を組織し、学校における具体策を議論した。

検討委員会からは、中間報告書として、裾野市教育委員会から意見を求められた、①コミュニケーション能力に関すること、②インクルーシブ教育に関すること、③地域コミュニティに関すること、④ICT教育に関すること、を中心とした議論の様子を報告した。

令和6年度の検討委員会も合計5回の会合を開催した。前年度の話し合いでは、能力やスキルをどう伸ばすかといった個々へのアプローチについての話が多かった感があった。しかし、人口減少が進む中、個々の能力を伸ばすだけでなく、環境を適切に調節していく視点が必要であると感じ、「環境を調整する」ことが裾野独自の取組になるのではないかという考えの元、議論を進めた。また、常に子供の視線に立った話し合いを意識し、子供の「やってみたい」を引き出し、後押しできるような話し合いを続けた。

本提言書では、裾野市や現代の教育そして社会が直面している課題と、それに対する裾野市らしい教育のあり方を提言する。我々の目標は、子供だけでなく、子供を取り巻く地域や大人もウェルビーイングを実感できるような、素敵な街づくりにつながる提言をすることである。

この提言が、教育現場の実践や地域社会の活動に結び付き、未来を担う子供たちが健やかに成長し、魅力あふれるまち「すその」の一員としてウェルビーイングを叶えられることを強く願っている。

裾野市の教育のあり方検討委員会  
委員長 村山 功

## II 裾野市の教育のあり方検討委員会

### 1 検討委員会の目的

裾野市立小学校及び中学校における教育効果を高めるための適正な教育環境について調査及び検討するため、検討委員会を設置した。ここでは、小中学校における次に掲げる事項について調査及び検討する。

- ・望ましい教育環境の実現に向けて必要となること
- ・本市の強みを生かした学校文化の創造に関すること
- ・学校施設の適正化に関すること
- ・その他、教育環境の適正化に関し必要なこと

### 2 検討委員会の設置理由

第Ⅰ期検討委員会では、学校施設の適正化について主に検討を進めたが、再編後の教育のあり方についての検討は十分とは言えなかった。そこで、検討委員会を設置し、第Ⅰ期検討委員会で出た課題と再編説明会で出た話題を基に、以下の4つを論点として検討委員会提示し、これからの裾野市の教育のあり方について論議を進めることとした。

- (1) 児童生徒数が減少していく中、子供たちのコミュニケーション能力を育成するにはどうしたらいいか。
- (2) 個別の支援を必要とする児童生徒が増加する中、インクルーシブの視点から見て、特別支援教育はどうあるべきか。
- (3) 人口減少や価値観の多様化が進み、地域の活力が低下する中、社会と関わる楽しさや大切さを感じる子供たちをどのように育てればいいのか。
- (4) 急速に進化するICTをどのように教育に活用できるか。

委員には、高校生や20代の若い人を加え、今感じていることを話してもらいながら議論を進めるようにした。

また、一つ一つの課題に対して裾野らしさと子供の視点を意識しながら議論を展開した。

### 3 令和5・6年度に開催した検討委員会

<令和5年度>

開催日		検討事項
第1回	令和5年 7月5日	・趣旨説明 ・学校教育の現状報告及び課題確認 ・子供たちのコミュニケーション能力の育成 ・ウェルビーイングとエージェンシー
第2回	令和5年 9月6日	・プロジェクトチーム会議報告 ・裾野市の特別支援教育 ・野口晃菜氏による講義「インクルーシブ教育」
第3回	令和5年 11月8日	・コミュニケーション能力の育成まとめ ・社会と関わる楽しさを感じ、自ら行動する子供たちをどのように育てるか

第4回	令和6年 1月12日	・人とのつながりを大事にし、よりよく生きていくことを目指す子供たちを育てるには、ICTを使ってどのような教育ができるか
第5回	令和6年 2月13日	・令和5年度裾野市の教育のあり方検討委員会報告書 ・裾野市が目指す教育 ・今後検討すべき事項

<令和6年度>

開催日		検討事項
第1回	令和6年 7月16日	(裾野市の児童生徒の推移、学校再編の状況、教育の課題等についてを踏まえ) ・報告書の説明、裾野市の不登校対策について ・裾野市の目指す教育について ・人と人をつなぐ視点について趣旨説明
第2回	令和6年 9月17日	・自分を生かす教育を実現させるためには、どのような環境作りや取組をしていったらいいか、どんなことに気を付けたらいいか
第3回	令和6年 10月25日	・地域とともにある教育を行うには、どのような環境作りや取組をしていったらいいか、何を大切にしていたらいいか ・多様性に満ちた教育を行うには、どのような環境作りや取組をしていったらいいか、何を大切にしていたらいいか
第4回	令和6年 11月27日	・自分を生かす教育の取組について ・多様性に満ちた教育の取組について ・地域とともにある教育の取組について
第5回	令和7年 1月22日	・令和6年度裾野市の教育のあり方検討委員会提言書の素案の検討

#### 4 委員の構成

	氏名	区分	備考
1	村山 功	学識経験者 静岡大学教授	委員長
2	豊福 静代	学識経験者	副委員長
3	石原 誠太	学識経験者 一般社団法人 UNIVA	
4	柴田 寛文	学識経験者 一般社団法人 UNIVA	
5	岩崎 正行 (R5)	区長連合会長	
6	湯山 芳健 (R6)	学識経験者	
7	渡辺 裕武 (R5)	市 PTA 連合会長	
8	薄井 康夫 (R6)	市 PTA 連合会長	
9	八木 謙樹	公募	
10	河内 健斗	高校生の代表	
11	持田 芳忠	中学校教職員の代表	
12	丸山 雅人 (R5)	小学校教職員の代表	
13	飯塚由美子 (R6)	小学校教職員の代表	

#### 5 プロジェクトチーム会議

検討委員会の議論を踏まえ、これからの学校づくりの具体的な検討をするため、プロジェクトチーム会議を設置した。全小中学校の代表1名が参加し、目指す子供像や子供たちにつけたい力、具体的にどのような手立てが必要か、グループごとに検討する。

※プロジェクトチームで話し合われた内容は、資料として添付。

### Ⅲ 裾野市の学校再編

#### Ⅰ 学校教育施設再編基本計画策定に至るまでの経緯

本市が抱える児童生徒数の減少と学校施設の老朽化という課題に対して、第Ⅰ期裾野市の教育のあり方検討委員会により、望ましい教育環境の実現を図るために必要となること、学校規模の適正化に関する事など、将来に向けた学校の教育環境や教育効果について議論が進められ、令和2年3月に提言を受けた。

その後、第2期裾野市教育振興基本計画の策定を経て、本市の教育理念である「学びあい、高めあいながら、人間性豊かに未来を目指す人づくり」を実現するためには、望ましい教育環境を長期にわたり途切れることなく整備する必要を再認識した。

望ましい教育環境とは、児童生徒が集団の中で、多様な考え方に触れ、認め合い、切磋琢磨することを通じて思考力や表現力、判断力、問題解決能力を育み社会性や規範意識を身につけることができる環境であり、この環境を確保し、教育の質の更なる充実に繋げるためには、小中学校の再編を行わなければならない状況にある。

令和3年度からは、学校再編に向けた意見交換会及びパブリックコメントを実施し、再編推進本部及び検討委員会で議論を重ね、令和5年3月に学校教育施設再編基本計画を策定した。

本計画に基づく小中学校の再編整備は、「児童生徒数の減少」と「学校施設の老朽化」という課題を解決するだけでなく、未来社会を担う子供たちのための整備であり、これまで「施設や設備」に費やしてきた支出を「人づくり」のための支出へ充当する、「床（施設・設備等）」から「人」への教育費の転換を目的としている。

年度	内容
R1	裾野市の教育のあり方検討委員会から提言を受ける
R2	第2期 裾野市教育振興基本計画の策定 裾野市学校施設長寿命化計画の策定
R3 R4	再編推進本部における検討（全7回） 再編検討委員会における検討（全6回） 学校再編意見交換会での意見交換（全88回 1000人以上） 学校教育施設再編基本計画（案）に対するパブリックコメントの実施（全7件） 外部有識者で構成される再編基本計画審議会による諮問答申（全4回）

## 2 学校教育施設再編基本計画

### (1) 計画の期間

令和 5 年度から令和 19 年度までの 15 年間とし、前期（令和 5 年度から令和 9 年度）、中期（令和 10 年度から令和 14 年度）、後期（令和 15 年度から令和 19 年度）の各期 5 年で計画する。

### (2) 再編整備に係る基本的な考え方

再編整備は「適正規模」と「適正配置」の両面を総合的に判断し実施する。

本市における適正規模とは、クラス替えが可能な1学年2学級以上となる規模とし、小学校では「複式学級」になる可能性が高い場合は、再編（統合）について早期に検討を開始する。

本市における適正配置とは、既存の学校施設及び用地を活用することを前提に、地理的条件に加え社会的な成り立ちによる生活圏域に配慮しつつ、全市的なバランスを考慮した配置とする。

### (3) 具体的な取組み

- ① 向田小学校と東小学校の再編（統合）【前期における取組み】
- ② 富岡第二小学校と富岡第一小学校の再編（統合）【前期～中期における取組み】
- ③ 須山中学校と深良中学校と富岡中学校の再編（統合）【中期～後期における取組み】
- ④ 須山小学校の小規模特認校制度の導入【中期における取組み】
- ⑤ 千福が丘小学校と富岡第一小学校の再編（統合）【中期～後期における取組み】

	前期（R5～R9）	中期（R10～R14）	後期（R15～R19）
①	向田小学校と東小学校の再編（統合）	向田小学校跡地への東中学校の移転	
②		富岡第二小学校と富岡第一小学校の再編（統合）	
③		須山中学校と深良中学校と富岡中学校の再編（統合）	
④		須山小学校の小規模特認校制度の導入	
⑤			千福が丘小学校と富岡第一小学校の再編（統合）

#### IV 裾野市の目指す教育（裾野市の教育のあり方についての提言）

##### 1 基本的な考え方（人と人をつなぐ教育）

現代社会における教育は、人口減少や多様化などの変化の中で、子供たちが自分の個性を最大限に発揮し、他者と協力しながら未来を切り拓く力を育むことを目指している。また、教育の目的は、単に知識を習得したり、個々の能力を伸ばしたりすることだけでなく、人と人とのつながりを強化し、より良い社会を築くための基盤を作ることにある。文部科学省によると、「学びのチカラで人と社会を未来へつなぐ」という視点が強調されており、教育は個人の成長だけでなく、社会全体の進歩に貢献することが期待されている。

また、人口減少が進む中、OECD が示しているウェルビーイングを目指してよりよい社会を創るには、個人の能力を育成するだけでなく、個人を取り巻く教育環境に目を向けて、環境との関わりの中で、1人ひとりが自分を生かしながら、人とつながっていく教育を推進していくことが望まれる。そうすれば、子供は主体性を持って自己と他者を大切にしながら、やりたいことを実現していくことができるだろう。

裾野市はかつて5つの村がそれぞれ独自の歴史や文化を築いていた地域で、それらの村が合併し市として一体となった後も、各地域の特色ある教育が継承されていた。しかし人口減少が進み、学校のあり方を考えていく上では、地域と学校の関係の変化にも目を向けていくことが求められる。

これからの裾野市の教育は、学校で完結するものではなく、地域社会との連携が不可欠である。裾野市には、お互いに助け合う意識が高いというよさがある。そのよさを活かし、人との結びつきを大切にしながら、地域全体で子供たちを支え、子供たちが成長する中で、地域社会も一緒に育っていくことが重要である。これにより、裾野市全体が魅力的な街となり、子供たちが未来を切り拓く力を持つことができるだろう。

多様性が顕在化する社会においては、1人ひとりの安心・安全な居場所を確保し、個別最適な学びを保障する必要がある。一方で、多様な人と出会い、さらにはその人たちと交わり合う経験を重ねることも大切である。このような経験の中で、内在する力も引き出せされ、自分というものが広がっていくだろう。

人と人、個人と地域が相互作用することで、化学反応が起こり、新たなものを生むことができる。このような環境を整えることで、より良いコミュニケーションが生まれ、個々の能力が発揮され、自分を生かしながらよりよい社会を切り拓いていけると考える。これらのことから、裾野がこれから目指す教育として「人と人をつなぐ教育」を推奨する。

次の章では、「人と人をつなぐ教育」を進める中で、「自分を生かす」とは何かを明確にしながら、「地域とともにある場では」「多様性の場では」というそれぞれの場に分けて、裾野市の教育のあり方を具体的に示していくこととする。

<参照～裾野市のあり方検討会 令和5年度のまとめ～>

令和5年度は、人口減少、社会の生活の多様化、地域社会の変化等の今日的な課題を整理した上で、学校再編に伴って出てきた4つの話題について、裾野市の強みを活かしてどのような教育が行われればよいかという視点で議論を進めた。

以下議論のまとめである。

<コミュニケーション能力に関わること>

コミュニケーションの力として醸成したい力を「伝える力」「聴く力」「かかわる力」「調整する力」「自己を肯定する力」「違いに気づく力」「受け入れる力」と捉える。そして、これらを個人の力として伸ばそうとするのではなく、「個人の持つ力」と「環境」との相互作用によって育む視点を持つことが望まれる。すなわち、児童生徒を取り巻く環境を調整することで育まれる力があることを全ての人が理解し、実践していくことが大切である。

<インクルーシブ教育に関わること>

日本の学校教育では、全ての子供を包括する教育を進めると共に、個別の教育的ニーズから、「多様な学びの場」を用意することが求められている。特別支援教育を充実させるために、教員の専門性の向上、多様性を受け入れ、共に生きようとする心情の醸成、学校外の専門機関との連携を進めていく必要がある。それと同時に、全ての人が共生できる社会を目指すというインクルーシブの考え方をもち、全ての子供がともに学び、「個別化」と「集団化」の学びの中で成長できるインクルーシブ教育をどう進めていくかを考えていくべきである。具体的には、通常学級そのものをインクルーシブにし、特別支援学級で培われた知見を導入していくことが重要である。

<地域コミュニティに関わること>

地域の中心に学校があった時代から、学校と地域社会の関係性が変わりゆく流れの中で、いかにして力を合わせて進めるかという観点を持つことが必要である。今後、学校再編が進む中で、学校と地域社会の関係が薄れるのではなく、地域と学校の連携や協働の役割を検討し、機能を強化するなど、今までの枠にとらわれず、連携・協働体制の再構築を考えていくことが望まれる。

<ICT教育に関わること>

ICTを活用する力をどう伸ばすかということだけに目を向けるのではなく、ICTの普及による利点に着目することが重要である。ICTにより、住んでいる場所や所属を超え、今まで以上に人との繋がりが広がることや、苦手を抱えている人も含め誰もが安心して参加できる環境を作ることなど、子供に新しい環境を開くことができる。そう考えると、コミュニケーション能力や社会とつながる力そのものが広がるという作用に着目し、ICTを様々な場面で活用していくべきである。

## 2 人と人をつなぐ教育の視点

### (1) 自分を生かす教育

現在、急激な少子高齢化による労働人口の減少や多様化の進行など、社会構造が大きく変化している。このような状況下において、誰も予測できない未来を切り拓いていくためには、人と人がつながって個々の力を結集し、互いに補っていくことが必要である。未来を担う子供たちは、多様なメンバーで構成された集団や変化の激しい社会の中で自分の個性やよさを発揮するという「自分を生かす」ことが求められる。

「自分を生かす」ことは、子供たちが抱える困難の多様化、複雑化に対応するとともに、一人ひとりが心身ともに健やかに、充実した毎日を送れるようにすることにもつながる。文部科学省の第4期教育振興基本計画には、教育に関連するウェルビーイングの要素として、自己肯定感や協働性、社会貢献意識などが挙げられている。子供たちが様々な活動や課題解決の場面において自分を生かすことを通して、これらの要素を満たし、ウェルビーイングを向上させることが可能になる。

#### ① 「自分を生かす」ために大切な力

集団や社会の中で「自分を生かす」には、主体的に考え、行動する力と、他者と関わる力が大切である。一人ひとりが活動の目標や課題を自分事としてとらえ、主体的にかかわろうとすることは、他者と協働する際に自分の個性やよさを発揮する原動力になる。また、意見交換や協議を通して、自他のよさや違いからの学びの向上や、共通理解の深化といった関わりは、他者との協力関係を構築することにつながる。

ここで押さえておきたいことは、これらの力を一人ひとりが同じように伸ばし、身に付けることを求めるのではなく、誰かの力を借りるなどして他者を頼ってもよいという考え方を共有することである。多様性が進行する中で、全員に同じことを求めるのは非常に難しいことであり、結果的に集団や社会全体の力の減少につながる。例えば、集団の中に他者と関わるのが苦手な人がいる場合は、他者と関わるのが得意な人が仲介役となることで、全体とのつながりを生み出すことができる。このような関係が築かれることで、より多くの人が自分を生かし自分の力を発揮できるようになり、結果として社会全体の活力が高まることが期待される。

#### ② 「自分を生かす」教育を進めるために

子供たちは、集団や社会の中で自分を生かす経験が必要である。なぜなら、自分を生かす上で自分の個性とは何か、自分のよさや弱みは何か、どうしたら自分を生かすことができるのかを自分なりにとらえることが大切だからである。例えば、学校行事や地域の活動などで自分の考えを述べて計画に反映させたり、運営に携わったりすることが考えられる。また、固定化されたメンバーではなく多様な人と一緒に活動することも大切だろう。このようなことを経験して周囲からの反応や意見を得ることによって、達成感や成功体験を積み重ねることが可能になり、自分の個性やよさに気づいていくと考えられる。

子供たちが自分を生かす経験を積み重ねるには、子供に関わる全ての大人が自分を生かす教育を進めるための環境を整えることが重要である。例えば、子供たちが多様な人と出会う機会や、一人ひとりが自分を生かすことができる機会をつくることが考えられる。また、子供たちが安心して自分を出すことができるように、失敗してもやり直すことができるという安心感や心理的安全性に満ちた集団づくりも大切である。

これらのことは、子供にも大人にも余裕があってこそ実現する。学校、地域、行政などの関係者が一体となり、「必須」とされる事項を柔軟に見直すことで、時間的・心理的な余裕が生まれ、より充実した教育が可能となる。

## (2) 地域とともにある教育

人口減少や家族形態の変容、価値観の多様化等を背景に、地域社会とのつながりの希薄化が危惧されている。本来、教育は学校のみで行われるものではなく、家庭や地域社会が教育の場として十分な機能を発揮することで子供の健やかな成長へとつながる。しかし、学校だけに様々な課題や責任が課される事態となっており、教育を担保することには限界が来ている。教育を受ける環境自体を変化させ、子供にとって魅力的な学校、地域社会であることが重要である。

### ① 子供が主体であるために

子供にとって学校は、安全・安心な環境で学び、多様な他者と関わることで心身ともに成長していくための大切な居場所の一つである。家庭や地域社会も同様に、子供にとって大切な居場所となる。子供一人ひとりが学びの主体となり、自分の選んだ居場所で、学びたいと思った時に学べる環境、やりたいことを言える環境、やりたいことが実現できる環境を整えておく必要がある。そのためには、周囲の大人が連携して、子供が主体となれる環境に変化させ、関わっていくことが求められている。

### ② 地域を拓く

裾野市は、南北にわたり5つの地区で構成され、それぞれ特色のある学校経営を行っている。その特色を生かすことは学校の強みとなっているが、学校再編等を視野に入れると、今後は地区の壁を取り除き、裾野市全体で子供を育ていくという視点を持つことが重要である。子供を取り巻く地域を拓いていくことは、子供の可能性を伸ばしていくことにつながり、更なる強みへとつながる。

### ③ コミュニティの交代

親が役員を受けられない、参加することに意味を見出せない等の理由から子供会やPTA加入率が減少している。コロナ禍回復後には、つながりの希薄化が進んでおり、各地域の催しや行事等は企画されつつあるが、参加する人（大人も子どもも）も地区により減少している。子供が集まる企画を立てても、習い事等を優先する傾向から子供が集まらず、自治会等の運営も苦戦しているという課題がある。

そこで、発想を転換し、習い事やスポーツ等の特定の目的で集まった多様な集団に働きかけ、地縁の集団と結び付けていく工夫をすることで、子供や学校、地域を支える大きな力となることが考えられる。人が集まる意義を考えていく必要がある。

### ④ つなぐ

地域とともにある教育の実現のためには、「つなぐ」ことがキーワードとなる。子供が主体となって学んでいくための環境づくりとして、人と人をつなぐ、コミュニティをつなぐ等の「連携・協働」と、活動を持続可能なものとして次の世代へとつなぐ「継続・伝承」の意識を持つことが重要である。加えて、高い意識と調整力や実行力を持ち合わせたつなぎ手の存在、つなぎ手の育成は欠かすことができない。

### (3) 多様性に満ちた教育の取組

学級には、発達障害や特異な才能、家庭で日本語を話す頻度が少ない子供等、特性を持つ子供が存在している。社会や世界に目を向ければ、そうした特性やものの見方や考え方、価値観の多様性は計り知れない。一人ひとりの幸せさえも多様化している。この多様性に満ちた世界でウェルビーイングを実現させるために、多様性に満ちた教育が望まれる。

#### ① ダイバーシティ&インクルージョンの視点を持つ

ダイバーシティとは、様々な個性を持つ人たちが集まっている状態であり、インクルージョンとは、他人の個性を受け入れ、能力を発揮している状態である。まずは、個性が集まった状態の中で、一人ひとりがその個性や存在を認められ、受け入れられる環境であることが重要となる。教育の場面では、どんな場所においても心理的安全性が保たれるべきである。例えば、一緒にいて楽しいと感じる場であったり、授業において一人ひとりに合った目標や内容が設定されたり、学校以外の学びの場も認めたりすることが考えられる。

しかし、様々なニーズに合わせていくと集団が小さくなり、分離が進んでしまう。多様性を受け入れる中でそれぞれの個人が能力を発揮するためには、個々のニーズに応えながらも集団を分離しない方法を考えることが不可欠である。そして、多様な個性をもつ人々が関わり合っただけで多様性が満ちた状態になる。

#### ② 多様性をつなぐ

多様な個性がかかわりつながることでインクルージョンは生まれる。そのためには、多様な個性をもつ個人同士のコミュニケーションやかかわりをどのように生み出すか、どのように多様な人をつなぎ、どのように対話を起こしていくかなどの仕掛けや環境が必要になる。多様な個人がただ同じ場にいるだけではインクルージョンは生まれにくい。つまり、多様な個人をつないでいく人の存在が大切になる。学校教育の場では、多くの場合、学校や教員がその役割を担う。学校は、多様性が顕在化することを前提としたカリキュラムを作る必要がある。例えば、授業では、個別最適な学びと協働的な学びを充実させることや多様な人とかかわる機会を設定することが考えられる。しかし、かかわりの目的を一方向的に話を聞くだけにとどめてはいけない。双方向で対話することが重要である。

また、つながりのもち方についても様々な方法が考えられる。自分の強み同士でつながるだけでなく、自分の弱みの部分でつながること等の方法も考えられる。

#### ③ 自己選択・自己決定できる環境

多様性が満ちた教育では、学習者個人が学習方法や目標、課題などを自分自身の判断で選択する。子供たちは、学習や生活の中で様々なことを自己選択・自己決定することを繰り返し経験することで、その力が育っていく。日々の授業でもこれに取り組むべきである。探究学習もその一つの方法となる。自分の力で課題解決できたり、学校や地域によい変化を生むことができたりした経験が子供たちの「やってみよう」「知りたい」という気持ちを育てる。学校や地域を、子供たちの「こういう体験をしてみよう」という思いが実現できる場としたい。

## V おわりに

本提言書は、裾野市の未来を担う子供たちのために、教育環境の適正化と裾野市独自の教育のあり方を模索しながら、地域とともに育てる教育の方向性を示すものとしてまとめた。本提言書に示された考え方が、令和8年度から令和12年度にかけて策定される「第3期教育振興基本計画」の基盤となり、教育現場や地域社会における具体的な施策へと結びついていくことを期待している。

裾野市の教育は、単なる知識やスキルの習得にとどまるものではなく、子供たちが自らを生き、人と人とのつながりの中で社会を形作っていく力を育むことを目的としている。人口減少が進み、地域社会の構造が変化していく中で、子供たちが「やってみたい」という気持ちを持ち、未来への希望を育むことができるような環境の整備が重要だ。本提言書が、裾野市に関わるすべての人々の手によって、子供たちの未来を支える新たな教育の形へとつながることを願っている。

最後に、本提言書の策定にあたり、多くの関係者の皆様に貴重なご意見をいただいたことに心より感謝申し上げたい。これからも裾野市の教育の充実と発展のため、皆様とともに歩みを進めていきたい。

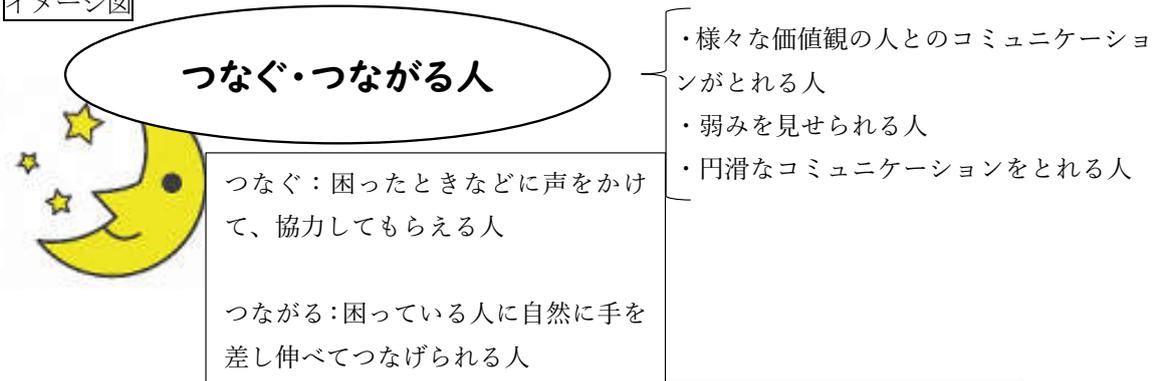
# 資料

～令和6年度 プロジェクトチームのまとめ～



# A グループ 「授業を軸としたコミュニケーション能力の育成」

イメージ図



社会へ飛び立って行って

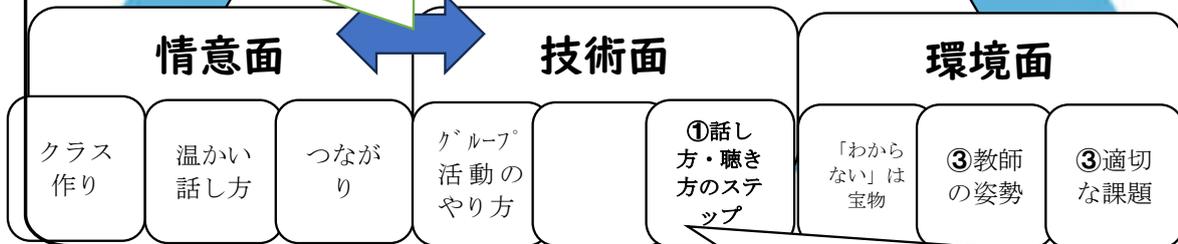
コミュニケー  
ション能力

9年間の積み重ね

仲間の考えを聞き合ったり、自分の思いを伝えあったりする経験を重ねる。

授業づくり

②安心して思いを伝えあえること  
とでお互いに関わり合って  
**成功体験を重ねていく**



## ①話し方・聴き方のステップ

話し合い活動において、自分の思いを伝えたり、話を聴いてもらえたりという安心のためのツールとしてステップを使う。これらを習得することで、話を聴いてもらいやすくなったり、相手の言いたいことを聴きとりやすくなったりすることを意識する。これはツールのため、**身につけることが目標ではなく、これを使ってコミュニケーションをとることが目標**だということを忘れてはいけない。(このステップで安心して話を聴いてもらえるという共通のベースができると安心感につながる。)

話すステップ（案）

ステップ	
1	みんなの方を見て話す。
2	みんなに伝わる大きさで話す。
3	わかっているか確認しながら話す。
4	自分の考えと比べて話す①（「～さんと同じで～」 「～さんと違って～」）
5	自分の考えと比べて話す②（「～さんところまでは同じで～」 「～さんの考えはここまではわかるけど、ここからは～」）

聴くステップ（案）

ステップ	
1	話している人の方を見て聴く。
2	最後まで聴く。
3	反応を声に出して聴く。
4	同じことをもう一度言えるようにし っかり聴く。自分の思ったことを口 に出して反応する。
5	話し手が言いたいことを分かって して聴く。（後で、「～さんが言いた いことはこういうことだね。」と言 えるように）

②情意面と技能面はお互いに関わり合うことで、話し合い活動がうまくいき、成功体験を積み重ねられる。小学校のうちにこの**成功体験をたくさん積み重ねる**ことが、中学校で生きてくる。（須山小中学校の例）

③教師の姿勢として、子供たちが話しやすい雰囲気を作るために、**ソーシャルスキルやカウンセリングの研修の研修などを行う**ことも必要になってくるかもしれない。また、授業で子供たちが話し合っ、学習を深めるためには、**適切な課題を設定**し、子供たちが考えたい課題を提示し、考えたことを言いたくなるように仕掛ける必要がある。また、考えるときには、いろいろな材料（調べるためには Chromebook を使えるようにする、辞書、実験道具など確認するもの他に説明するときには仕えるホワイトボードや実物投影機など）を準備することも大切である。

子供同士のコミュニケーション向上のための教員の**手立て(心構え)**

——下地として——
・ 普段からは話しやすい温かい雰囲気づくり（教師へも友達へも）（ <b>安心感・居場所作り</b> ）。
・ 子供たちを認め、価値づける声掛け（ <b>自己肯定感の向上</b> ）。
話す聞くステップができている子を褒める。（ <b>子供たちへの定着</b> ）
話している子の方を見ない、うなずかない。（ <b>対教師にならない</b> ）
児童の視線から見えないようになる。（ <b>困ったときに助けてくれるのは教師→友達</b> ）
沈黙をがまんする。（ <b>話し合いが止まってしまっても、自分たちで解決しようとする気持ちを高める</b> ）
適切な課題のみを提示して、子供に任せる勇氣。（ <b>課題の提示だけで子供たちだけで進められる授業→成功体験や自信</b> ）
自己決定を促す言葉がけを繰り返す（ <b>主体性を伸ばし、価値ある成功体験につながっていく</b> ）
子供に寄り添った言葉がけ（ <b>その場に安心感を与え、積極的なコミュニケーションの基盤をつくる</b> ）（ <b>温かい言葉や聴き方が、子供のコミュニケーションの手本になる</b> ）
カウンセリング(傾聴)のスキルアップ研修やソーシャルスキルトレーニング（ <b>聴く姿の手本を教師が示していく。</b> ）【人間関係プログラムの上手な活用。】

## 令和6年度 プロジェクトチーム会議 チームB「総合的な学習の時間の再構築」

[これからの時代を見据えると…]

- ・知識・技能の習得 ⇒ 答えのない問題に立ち向かう力（“生きる力”）
- ・VUCAの時代(変わりやすさ、不確実性、複雑さ、曖昧さ) ⇒ 柔軟な思考力・対話力
- ・Learning Compass(学びの羅針盤) ウェルビーイング エイジェンシー (by OECD)

### 【学習指導要領の改訂（総合的な学習の時間）の基本的な考え方】

実社会や実生活と関わりのある学びに主体的に取り組んだり、異なる多様な他者との対話を通じて考えを広げたり深めたりする学びの実現 = 「主体的・対話的で深い学び」

○探究的な学習の過程を一層重視する。

→ 4つのプロセス（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）の質的充実

### 【市内小中学校の課題】

- ・活動は定着しているものの、「調べて発表」「活動ありき」の状況が多く見られる。
- ・各学校の情報が共有されず、小中通してのカリキュラムや学校間の連携が進んでいない。
- ・目標や求められる力を意識して、今取り組んでいることを再構築する必要がある。
- ・地域人材や企業等とのつながりを構築することが難しい。

## ☆☆チームBからの提案☆☆

### ●総合的な学習の時間を「探究的な学び」を中心とした活動にする！

#### ①市内の有志教員で、「探究プロジェクト研究会」を発足し、研究する。

- 探究学習のよさ(楽しさ、わくわく感)の発信
- 探究学習の資質・能力の見える化(ルーブリック評価の作成)
- 市内小中学校や他市町の取り組みの共有(カリキュラム・マネジメント)
- 探究プロセスの研究(課題設定、ゴール設定、PBL学習)
- 外部機関との連携方法の確立
- 講師の招聘、先進地区(校)の視察

#### ②子供、教員の学びをサポートする拠点「探究プロジェクトセンター」を設置する。

- 「探究的な学び」に関する情報や研修の拠点づくり(市ポータルサイトの運営)
- 行政や地域、企業との接続や連携のサポート体制の構築(人材、協力企業のリスト)
- 教員や関係者を対象にした研修会、講演会の開催

★最終的には、授業を子供主体の「探究的な学び」スタイルに変えていく。

～授業改善を推進し、「すその探究的学び」の確立を目指す～



このプロジェクトに、多くの教員や関係者が参画し、「人と人をつなぐ教育」を実現したい！

## C グループ 「多様性を意識した校内サポート体制の充実」

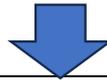
【今日的な課題】 児童生徒個人・家庭環境・不登校・外国籍・特別支援等・小規模校

【児童・生徒が楽しいと感じること】

休み時間 部活 友達関係 給食 班活動 授業 協力すること 遊ぶ 話す ドッジボール  
 図工 クロームブック 下校 先生 などなど

※西中・東小・富一小・西小の一部児童によるアンケートより

年代を問わず多岐にわたり教育課程全般に関わっている。



校内サポート体制の充実が、学校活動全体を魅力的にすることにつながる

【校内サポート体制の充実に必要なこと】

児童生徒情報の共有 児童生徒の居場所づくり 職員の仕事・研修の効率化 不登校等の予防的な体制・支援  
 外部機関等との連携

【具体的な方向性】

COCOLO プランの  
 対応段階と照らし合わせると…

すその COCOLO プランを中心に魅力ある学校づくりを継続する ※資料 1

困難課題対応的生徒指導	・ 自立支援 (SC、SSW、ふれあい教室など) ・ SS ルーム等の充実	<p>職員の意識改革</p>
課題早期発見対応	・ 未然予防・ICT の活用・学年担任制・教科担任制の導入 ・ SS ルーム等の充実	
課題未然防止教育	・ ICT の活用・学年担任制・教科担任制の導入・チーム学校としての支援体制	
発達支持的生徒指導	・ 個別最適化 ・ インクルーシブな授業実践 ・ 新しい部活動の在り方・地域との協力関係 ・ 児童生徒の思いが反映される授業 ・ 地域活動 (CS、ふれあい活動)・ICT の活用 ・ 教職員の働き方改革の継続	

【特に力を入れたいポイント】

**地域との連携** … 人材バンク、SC 等を活用し、裾野市全体で児童生徒を支える風土づくりをめざし、地域と児童生徒との関りを増やす、[地域ボランティアと連携した活動を積極的に教育課程に反映させる※資料 2](#)

**教師の意識改革** … 言葉遣い・表情などの児童生徒と接し方、保護者・地域対応の仕方、小中学校教員の交流、新しい取り組み・対応に関する研修、常に自省する気持ち、[各校接遇研修を取り入れる](#)

児童生徒、教職員、学校、地域などの強みを生かした個性ある学校づくりをめざす

資料1 校内のサポート体制を考える時、誰に、どんな（どのように）するかを整理し具体策を考える

不登校以外にも対応できるような体制づくりが大切である

	課題	ねらい	具体策
対象	人（誰？）	空間（どこ？）	時間（いつ？）
不登校ではない児童	様々な児童	学校はどこも教室で休まる場所がない	多忙化
	複数の目で見届け	気分転換 同じ興味の者が集合	自分の時間 ゆとり
	学年担任制	のんびりできる部屋	休み時間の確保 半日授業の日 選択できる授業
不登校になりそうな児童	話を聞いてあげる	教室だとつらい。でも、登校はしたい	8時登校 6時間目終了下校が原則
	個別対応	学校とのつながりを切らない	1日絶対にいなければならない概念の 転換
	支援員	教室以外で登校できる場所の確保	自分が学校にいられる時間を決め、その時間学校で活動する
不登校の児童	課題が複雑化	外部とのつながりが薄くなっていく	本人を含め接点を持つ機会が、時間外だったり、不定期だったり…
	専門的な対応	孤立しないように外部とつながりを持つ	本人も保護者の方も負担を少なく外部と接点を持てる
	SC	SC SSW	状況を複数年続けて把握できる人（担任は単年で交代）

## 資料2 地域ボランティアとの連携事例

収穫関係（お茶摘み、手もみ体験、野菜の収穫、稲の苗植え・苗さし・稲刈り・餅つき、サツマイモ・焼き芋、ジャガイモ、タマネギ、大根、など）

文化関係（七夕の竹の用意・片付け、絵手紙教室、茶道教室、工作教室、読み聞かせ、図書室整備、お茶の入れ方教室など）

授業支援（プール清掃、虫取り、昔の遊び、昔の道具展示、書初め教室、戦時中の暮らし、リサイクル講話、職場見学職場体験の受け入れ・引率、租税教室、高校生講話、ゲストティーチャーなど）

学校生活支援（新1年生の身支度補助、駐車場交通整理、プール清掃、不登校児支援の見守り、環境整備活動、花植え活動など）

**地域ボランティアの輪を広げ、裾野市で児童生徒を育てる体制づくりをめざしたい**